

# たかさし「史話 58」 播州への米軍の進駐

ピュリッツァー賞を受賞したジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（二〇〇一年）は、

「天皇制民主主義」の日米合作を論証した好著ですが、確かに播州の戦後史をみても、

米軍とこれを受け入れる日本側地方行政との間には、ある響き合いが認められます。

戦後関西への本格的な米軍進駐は、昭和二〇（一九四五）年九月二五日に始まりま

す。瀬戸内海の機雷を除去できておらず、和歌山からの上陸となりましたが、同日夕刻

には米第六軍第三三師団（一万五〇〇〇名）の第一陣が兵庫

庫県に進駐しました。師団司令部は神戸に置かれ、二六日以降兵員の半数が宝塚・西宮・姫路へ移動します。

その前後をみますと、第六軍先遣隊の大阪・神戸視察が九月二一日で、翌二二日には

米国初期対日方針が公表されて占領の間接統治方式が確定し、天皇がマッカーサーを訪

問した二七日に第三三師団は姫路進駐を終えます。これを

念頭に『神戸新聞』の記事をみてみましょう。まず、先遣隊の到着した日から警察に動きが表れています。

「高砂署では米軍の進駐に備へて署員の英語会話の講座を二十一日から開」き、署

長以下「毎朝二時間授業に励むこととなった。」（9／23）

「尾上村元飛行部隊に■時進駐してゐる第六軍飛行隊の一部は、その後兵舎の改造

を行ひ将兵約三十名が仮泊」するが、「地元尾上村では一行

を歓迎し村当局が万端の世話をやき、また高砂水道課では二日上水道工事を行ひ洗面所

シャワー等の取付けを行つた。」（10／5）

「姫路市が市民のために夜間英語学校を開設する計画を知るや、進駐軍当局では進んで米軍中から教師の派遣方を快諾し、実際会話の教授に乗り出すことになり市当局関

係者感激させ」た。

（10／6）

「全播州路の二市百八十四町村長は原姫路市長の斡旋により姫路進駐軍の招集に応じて二十日姫路市役所に集

合、「進駐軍の使命」を語るラモート中佐の熱弁を聞いた。」（10／22）

記事からは、英語熱はまず行政レベルで一気に高まること、米軍の東播進駐が一〇月

二日ごろだということも分かります。無論、こういう日米協調を示す記事は事態の一面

しか伝えていません。米軍の力を背景にした検閲も査察も報道されはしないからです。

ちなみに、米第六軍司令部は昭和二〇年末に解消され、第八軍指揮下で神戸軍政部の活動は本格化します。

（市史編さん専門委員

大森実）

※ 本文中の■は判読できない部分です。